

日本の昔話における親子関係

——子どもの発達と対象関係の展開——

心理学部臨床心理学科 高橋裕子

抄録：前稿において日本の昔話における妊娠・出産をめぐる夫婦の心理的過程とその結果としての親子関係を葛藤内包という概念を手がかりに考察した。本稿においては、物語に描かれた主人公の誕生から思春期・青年期までの発達および親子を中心とした対象関係を素材に、現代の人生前半の発達段階における臨床的問題との比較・検討を行うことを目的とする。

キーワード：親子関係、対象関係、日本の昔話、臨床心理学

I はじめに

日本昔話大成には日本各地の口承による昔話が採集されており、話型別に分類された上で各話ごとに細部の異なる類話が追記されている。筆者は、前稿においてこれらの昔話における妊娠・出産をめぐる夫婦の心の動きとその結果としての親子関係について、葛藤内包性という言葉を手がかりに考察した。今回は再びそれらの物語のうち、「誕生」の項に収められた16話中夫婦の元に子どもが誕生するところから始まる11話を抽出し、素材とした。この項に類別される物語は主として異常誕生の物語であるが、異常受胎とは主題を異にしており、大半の物語の背景に民族神への祈願が介在し、水と関係する爬虫類や植物からの誕生が目立つことが指摘されている。一般に、このような誕生児を主人公とするような物語が本来の意味の昔話（メルヒェン）であると解説されており、より空想の度合いが濃い物語として位置づけられている。

本稿は、物語に描かれている主人公の誕生から思春期・青年期までの対象関係の推移を手がかりにして現代の人生前半の発達段階における親子関係についての臨床心理学的考察を目的とする。

II 内容

1. 物語の概要

本稿で取り扱う11話の概要を表1にまとめた。冒頭に長年子どもに恵まれない不妊の問題が示されているものが9話あり、うち6話は夫婦が「爺婆」と表現される年齢に達し、2話は40代の夫婦であることは前稿で述べたとおりである。いずれもこの時代には子どもを持つことは難しく、7話において子どもが授かるように神仏に祈願した結果、子どもを得ることができたと考えられる。

2. 発達の経過

1) 乳幼児期

昔話における乳幼児期はごく簡単に描かれており、親となった夫婦にとって誕生の経過が通常外であったことは何ら問題とされていないかのである。乳幼児期の詳細が語られているのは①と④のみであり、①では水神様から授かった「お授かり子」であることから、ひしゃくに水をはって田螺を入れ、神棚にあげていつ童になるかと待っていたが、その気配もなかった、という。子どもを神聖視して期待に胸を躍らせていた様子が描かれている。④においては、生まれてみる

表1 日本の昔話における

物語名	主人公・名前	両親	他者との関係	主な出来事	物語の結末
① 田螺息子	田螺童。期待されるが一向に大きくならない。	爺と婆 水神に願掛	皆に珍しがられる	父の仕事を手伝い、長者の娘と出会う 長者の末娘と結婚	娘の貞節によって立派な若者になり、長者とあがめられる
② 蛙息子	ドンキュー(蛙)	子のない夫婦 願掛	金持ちの娘を気に入り、通うが嫌われる	池にけ込まれ、鯉に呑み込まれる	父が釣った鯉の腹から立派な青年になって出てきて娘と結婚
③ 五分次郎 一寸法師鬼征伐型	五分しかない子ども。五分次郎	爺と婆 子のない夫婦	村の婆様	海辺から流される 化け物退治	長者の躰になり、村のおやかたとなって安楽に暮らす
④ 毘沙門さまの授かり子 一寸法師簪入型	おもちゃのような小さい子	43歳になるが子のない夫婦 毘沙門に願掛		鬼が島に行って鬼と戦い、打ち出の小槌で若者になる	鬼の宝を持ち帰り、毘沙門を建立。嫁をもらい、両親と暮らす
⑤ 一寸法師	指先位の男児 一寸法師	子のない夫婦 住吉様に願掛	姫	大家に奉公 鬼を追い払う	打ち出の小槌で一人前の侍になる
⑥ 親指太郎	豆太郎	子のない年寄りの夫婦 神頼み	旅のもの	親に自分を売らせるが、逃げ出す	飲み込まれた動物を腹の中から指図して家に戻り、父に腹から出してもらう
⑦ 寅千代丸	寅千代丸	子どものできない夫婦 寺に参る	坊主加那志 友達 王様	寺に手習いに行くが、嫉妬されて遠方にやられる	道中危険な目に遭うが、3年後無事戻る。父が試しに射た矢に当たり、陥れた友人は皆亡くなる
⑧ こんび太郎	童人形 こんび太郎	子のない不精な爺と婆	御堂コ太郎と石コ太郎を家来にする	力修業 化け物退治	助けた娘とそれぞれが結婚。爺婆も呼び寄せて安楽に暮らす
⑨ 蛇息子	人間から蛇に変わる竜吉	子がなく困っている夫婦 神様に願掛		家に置けなくなり、逃がされる	幾年後、両親が日照りのため雨を降らすよう頼む。静かに雨が降り続き、爺婆は代官から褒美をもらう
⑩ 桃太郎	桃から生まれる桃太郎	爺婆	犬、猿、雉を家来にする	鬼退治	鬼の宝を持ち帰り、天子様にほめられ褒美をもらう。爺婆に一生安楽させる
⑪ 瓜子織姫	川上からきた瓜から生まれる瓜姫	子のない爺婆	天邪鬼	村一番の機織名人 天邪鬼にとりつかれて亡くなる	死んだ体が長いふくべに変わる 両親の畑では胡瓜が豊作

と「おもちゃのように」小さいこどもであったため、「乳ぶさにもよう吸い付かんかった」ことから「鳥の羽根でみつをなめさせて育て」たところ、月日も経たないうちに「蚊の鳴くような声で話ができるように」成長し、「ごはん粒を一つぶ一つぶ食わせ」た、と親の強い養育意欲とその成果が記されている。

その他においては、⑦「一月育てれば一年育てたように、一年育てれば十二年そだてたように」、⑧「一升飯食らわせれば一升だけ、一斗飯焚けば一斗だけ、ずんがずんがと育て」、⑩「一杯食えば一杯だけ、二杯食えば二杯だけ大きくなった」、⑪「だんだんと大きくなって」などいずれの物語においても食べ物を与えて見守っていれば順調に育っていったという記述がなされている。しかし、①②では「大切に」④⑥⑩⑪には「かわいがって」③⑨には「大事にして」とその状況が表現されており、両親からの愛情と世話を十分に受けて育った様子がうかがわれる。

2) 児童期

両親の日常生活は一部にしか描かれていないが、⑥「爺さんが山に木伐りに行って」⑩「爺は山に柴刈りに、婆は川に洗濯に」などとされているように、日々の生活のために働く階層の人々であると推察される。昔話の舞台となる時代には現代のような教育制度が整えられておらず、就学年齢を区切りにした児童期は⑦に描かれているのみである。この物語においては、父親が「国一番の分限であった」とあり、他の物語の登場人物の生活水準とは異なっている。そのため、主人公が「七つの年」に手習いをしたいと言い出し、両親もそのつもりであったと返答して名付け親の加那志坊の寺に連れて行っている。坊に教えを受けて学問を修めるが、85人の生徒のうち最も出来が良かったため、学友の嫉妬を買って「師の寝首を取って…坊に成り代わろうとしている」と中傷され、師である坊もそれを真に受けてしまう。3年後に無事

に帰ることができれば無実が証明されると坊に告げられ、寺を追われるが、これは、初めて接した家族外の社会集団からの排除や不適応の体験であると見なすことができる。

3) 思春期・青年期

両親との関係は殆ど描かれなくなり、家族外の社会的関係についての叙述が中心となる。出会った人に受け容れられ、もてなされたり、喜ばれたり良好な関係を得ているものとして①③⑤がある。①は祭りが近づいたため町に米を売りに行く父親に着いて行き、町の長者に会って「神様の申し子」だと珍しがられる。③は海辺で遊んでいた時に木の葉に乗っていて流され、行き着いた村で歓迎される。⑤は大家に奉公を希望して受け入れられる。⑧⑩は物や力を介して相手が家来になるという主従関係を持つ様子が描かれ、⑧では黍団子をやる代わりに犬、猿、雉の動物たちが家来になるが、これらの動物は擬人化されており、⑩はこんび太郎と同じ力自慢の青年達である。

反対に、良好な関係を形成できないばかりか、他者の悪意など否定的側面にさらされるのが、次の4話である。②は年頃になって気に入った娘のところに通うが、蛙の姿をしているために嫌われ、往きかえりの道でも人に踏まれたり、蹴られたりし、ついには池に蹴り込まれて鯉に呑み込まれ、家に戻れなくなる。⑥は、自分を見た旅人が珍しがって見世物にしたがっている意図を感じ取り、旅人の申し出を拒絶した父親を説得して自分を売らせて家を離れる。途中で逃げ出し、藁の中に隠れていたところ、その藁を食べた牛を腹の中から暴れさせたために牛は殺され、捨てられたはらわたごと狼に食べられてしまう。しかし、再び腹の中から指図して家にたどり着き、父親が狼を殺して助け出している。⑦の主人公は友人からの嫉妬によって罪を着せられ、寺を追われた後、父親と別れの盃をして一番良い馬と七人力の金棒

を与えられて旅に出る。旅路では大きな猫、犬、牛に襲われるが打ち勝ち、罪人の集まる所にたどり着く。しかし、その場を納める王は事情を聞いて罪を問わず、88歳になったら戻るようにと齢を与えられ、国に戻った。3年の年月が経っており、主人公の三回忌を営んでいた父親は、戻った人物が本人であるか否かを試すために主人公に向かって7本の矢を放つ。矢は当たらず、本人であることが証明されて親子は再会する。翌日寺を訪ねたところ、全ての矢が主人公を中傷した7人の友人に当たり、「悪い友達はみな射られていた」と復讐が遂げられる。⑪では、山に行く両親は美しい娘に育った瓜姫に天邪鬼の怖さを警告したが、瓜姫は天邪鬼に説き伏せられて一緒に長者の家の桃を取りに行ってしまう。天邪鬼が自分は良い桃ばかりを食べ、瓜姫には汚いものばかりを投げるため、自分で木に登ったところが「もっと上のほうがよい」といわれて上まで登ったあげく、「長者殿の婆が来た」とおどかさされ、瓜姫は動転してその高い木から落ちて死んでしまう。

④においては両親以外の対人関係のうち、対戦の相手である鬼の記述が最も詳細である。次に「嫁をもらい」と異性が登場するが、主人公の新家庭について記述されている訳ではない。⑨では大きな蛇に変わった竜吉は、後に山に放されるため、他者との関係は全く描かれず、両親と再会するのも「幾年もの後」であるが、「前に子どもを捨てた山」に登り、名を呼ぶと「そこいらの木も草もみしみしとへし折りながら飛んで来た」とあり、両親も「よく成人したなぁ」と互いに再会を喜ぶ様子が見て取れる。そして、国中が日照りで困っているため、雨を降らせてほしいという両親の願いを「風も吹かせず、荒れもさせないように」雨を降らせることを約束し、実行する。このように、両親の願いを素直に聞いた主人公の内的な両親像は山に捨てられてからも良好なままに保たれていたものと考えられる。

Ⅲ 考 察

1. 心身の発達的特徴における相違

人間のこころの発達過程は心理学的にいくつかの時期に区分することが可能であり、各時期に応じた課題を見出すことができる。発達には順序や段階があり、その時期に重要な課題同士が相互に影響を与え合う関係が成立しているため、機が熟すという表現が最適であるように、多要因の準備がそれぞれ整い、その均衡によって新たな展開に至る発達経過をたどる。また、成長にふさわしい課題がその時期ごとに用意され、万一課題が積み残された場合にはその課題に直面するにふさわしい時期に再びその課題と出会うこととなる。また、課題への取り組み方やその達成の度合いとは直接関係なく、生涯にわたって何度か同一の課題が形を変えて繰り返されることもあり、その場合には何代にもわたる家族の歴史を視野に入れて検討すべき課題だと考えられることもその特徴である。

身体的な発達においては思春期・青年期頃まで身長や体重は増加する傾向をたどり、上昇に向かう発達過程として一種の明確性がある。心理的発達に関しては、体験の幅が広がることによって知的な能力はより複雑な内容をこなす段階に向かい、知識や語彙が豊富になるなどの点では身体的な発達のように上昇傾向を持つ。しかし、感情・情緒面においては必ずしもこの法則性は当てはまらない。例えば、幼児期、思春期・青年期の重要課題であり、中年期以降も人生の節目となる時期に立ち現れる自立の問題は、自由と独立を獲得する体験である一方、それまで依存していた対象を手放していく対象喪失の体験でもある。また、家族を起点にして社会集団に入っていくことは、新たな関係の広がり獲得であると同時に、それまで重要であった対象関係に質の変化をもたらすこととなり、馴れ親しんできた対象の喪失が必然となる。このように、何かを得ることはそれまで馴染んできたものを失うことにつながり、獲得と喪失とが

表裏一体である点において両価的である。こころの発達はこのような両価性と矛盾を常に抱えながら進行することとなる。

2. 発達早期におけるこころの発達

1) 乳幼児期

① 物語における乳幼児期の位置づけ

昔話において乳幼児期についての詳細な記述がほとんどないことは、この時期の親子関係の重要性が現在ほど注目されていなかったことによるものであろう。親が子どもの衣食住の世話をしてさえいけば、子どもはひとりで育つものだと見なされているかのようなのである。発達について学ぶ機会がなくとも子育てが滞りなく行われる例は現代にも認められ、物語に描かれた親子関係との共通性を見出すことができるのかもしれない。少なくとも、本稿における物語の冒頭に示される子どもの順調な発達は、両親が乳幼児期の主人公に対して自らの人間性の否定的な側面をほとんど向けず、全面的に肯定的な親として機能しているためであると考えられる。

どの夫婦も突然、または思いがけず子どもが出現したにもかかわらず、目の前に現れた子どもを育てる選択に迷いはない。夫婦の希望を具現化した子どもへの期待が、未知のものへの恐れや不安を上回ったことから養育者としての役割を選び、その役割を続ける労を厭うこともなかったと見なすことができる。ここに描かれている状況は、母親の原初的没頭（primary maternal preoccupation）と呼ばれ、子どもに対する親の側からの同一視でもあると解釈することができる。Winnicottによると、このような強い一体感の中で子どもは自己を肯定し、育っていくことが可能であり、昔話中の人生最早期の短い記述の中には心理的発達の糧となる子どもの世界観の形成過程が描かれている。

現代では1000g以下の超低出生体重児と名づけられた乳児の救命率が高まり、医療技術の進歩

が昔話という物語の世界を現実に変えたと言える。しかし、在胎週数が短い早産や、何らかの要因から標準の発育に至らなかったこれらの新生児は、例外なく出産直後から新生児集中治療室に入院して治療を受けることから、親との分離が愛着関係の形成に影響を与えたとの報告や、早産で産んだことへの罪悪感に親がとらわれて子どもへの働きかけが抑制されてしまうという研究結果など、満期正常出産に比べて親子の関係形成への阻害要因が多い現状がある。わが子の誕生の喜びと同時に、予想外の出来事に当惑と混乱を覚え、それが容易に治まらない場合も少なくない。ここで、まず問題となるのは、親自身の生育史には存在しない事態への馴染みのなさであるが、最近では、親自身も低出生体重児であったという場合もある。その際には、体験の次元では子どもとの共通性が認められるものの、新生児期の体験は親自身の記憶の中に明確には残されておらず、むしろ低体重児の出産は、日常は無意識下にある人生最早期に体験した不安を喚起し、再体験する機会となってしまう可能性を持つ。さらに、標準的ではない出生状況が繰り返されたことが親自身の不全感やその人生への不完全感、そして子育てに対する不安の要因となることも懸念される。このように、一般にイメージされている出産形態から外れる体験は、概して退院後の育児への高い不安に結びつき、それが十分解消されずに退院に至り、支援のないままに育児が続けられると時には虐待に至ることさえある。予測外の事態が不安を喚起することは出産時に限らず人間には当然起こり得ることであり、標準から脱落したと感ずることの影響がいかに大きいかを改めて認識させられる。

このように、出産後直ちに親らしい役割を取ることができない場合、医療現場や地域保健においては発達最早期における親の子どもに対する受容に問題があると見なされ、心理的援助の対象となることも少なくない。その際、親の内的世界の中で子どもという対象の部分的な異質性が全体を異

質だと感じるまでに広がり、「子どもが怖い」と表現されることさえある。出生時の状態がどのようであっても、その子どもに備わっている生来的な発達の過程は同じであるという事実が見失われ、発達課題への到達の速度や巧拙の差はあっても、障害や疾患にさえぎられないところまでは発達が進むという見通しを持つことができなくなっているのである。親自身が将来への時間的連続性を保てないことへの困難が「どうしてよいかわからない」という無力感を訴える言葉になって表現されることもあるが、これは、その子どもの発達の過程に関わる親としての自分自身も見失われ、一種の自己喪失に陥っていることを意味するため、その不確実感から強い不安や恐怖感を体験しているものと解釈できる。たとえば、それまでにその子どものきょうだいを育てた経験から新生児の発達過程を体験的に知っていたとしても、超低出生体重児の育児は発達の一定段階までは全く異質なものと捉えられ、過去の体験が異質性を直接解消するとは限らない。

この異質性は、予測される医学的な問題にある程度目処がつくことによっても解消の方向に向かうが、哺乳を繰り返すなど親子の接触が重ねられて情緒的な交流がなされる中、親が子どもの成長を実感するにつれて子どもに対する当初の異質性は徐々に部分に収斂されていく。やがて、一体感を発達させた親子としての関係が成立するが、この時、現実の次元では、親が退院後の生活について具体的な見通しを持つこと、そして必要な育児のスキルを身につけていることも重要である。

物語における両親、ことに母親が子どもに対して否定的側面を向けないことを先に述べたが、現代に現実に生きる親子関係の成立過程から考えると、この否定的側面とは、親が子どもに対して感じる異質性に喚起された不安や恐怖であり、自己不確実感から生じる依存欲求であるといえるであろう。

2) 児童期

本稿に挙げた物語は、先に述べたように学校教育制度が整っていない時代のものである。親からの自立を試みるまでに社会的集団に入る体験は、近隣の子どもたちとの交流に限られており、親子の二者関係から三者関係以上の社会的な対象関係への発展が就学制度によって促されていることが改めて理解できる。

また、全面的に良い親として機能し、子どもに対しては夫婦や1人の人間である側面を向けない両親との関係は、発達最早期の親子関係との継続性が高い。このような関係が変化するためには、③④のように偶然によって親子が離れるか、⑤⑧⑩のようにある日突然子どもが家を出ることを宣言することが必要となる。物語中の時代の平均的、あるいは理想的な親子の関係の移行様式だと考えられるが、いずれも子ども自身や親の問題による関係の悪化が直接的原因ではないところが現代との対比において特徴的である。全面的な肯定を受けとる世界から、必ずしもそうではない家族外の世界への移行が難しく、不適応の要因となり得ることは心理学的には周知の事実である。⑦は学問がよくできるという他者からの肯定的評価に値する事柄が友達の嫉妬を買って悪意にさらされるというそれまでの世界観が覆される体験の後、親役割の師もその悪意に動かされてしまう。このように、物語においては、親の肯定的な良い面とそうでない面とが人物ごとに見事に分裂(split)しており、主人公の親からは、この師のように弱い否定的な部分が排除されている。現実の親子関係においてもこの分裂が生じる場合があるものの、一般に人格は成熟につれて相反する現実を内包する力をつけるため、分裂機制が多用される対象関係は病理的であると理解される。物語に描かれたような分裂機制を持つ親の元で養育された場合、親が分裂した否定的な部分は時に子どもに向けられ、投げ込まれるため、子どもの自己イメージが歪み、子どももまた分裂の機制を用いる大人に育

つことは多くの臨床的事実が示唆するところである。

児童期は、家族外の対人関係を体験することを通して子どもの親に対する客観的な視点が芽生え、親も他の子どもとの比較を通して自身の子どもを見直すことになるため、幼児期までの一体感はさらに解消へと向かう。その一方で、親の側には子どもへの同一化を生じやすい機会がより多くなる。子どもが他者から否定的な評価を受けたことに抗議する態度はその最たるものであるが、そのような時、親は子どもが受けた評価や批判を自らへのもののように感じている。これは家族の内と外という区分に基づく子どもへの一体感であるが、就学という境界をもたない時代の物語における児童期には、子どもが親の手元を離れる事が少ないため、このような同一化は生じにくいように見受けられた。心理臨床の場で相談の対象となる問題は、その全てが親子関係に基点を持つといっても過言ではないが、接近することと距離ができることとの最適な均衡を子どもも自らが見出す作業を行う児童期は、物語においても重要な発達課題が遂行される時期であると考えられる。

3) 思春期・青年期

思春期・青年期の発達の重要性和複雑さはどのような発達理論にも述べられているが、これまでみてきた物語の主人公は、誕生時の特異な容姿や身体特徴などの特性を思春期・青年期と思われる時期まで持ち続けている。しかし、それが一向に社会的な障害にはなっていないところは注目値する。①から⑦までの主人公は並外れた小ささをもっているが、自らの力を試すに当たって自分が人並みであるか否かということがあまり大きな問題とはなっていない。むしろ相手に一旦呑み込まれるという捨て身の戦術や変身につながる体験を可能にしており、これは、乳幼児期の両親との関係に裏打ちされ、主人公自身が自己肯定感を高めた結果成立した事態であろう。同時に、物語の

世界においては際立った個性が幸運につながるものとされているところが興味深い。日本人は他者とのバランスにおいて物事を価値付ける傾向があると言われているが、物語の世界においては必ずしもそうではないようである。このような強い自己肯定感、早期の親子関係において特異な個性を全く問題視せずに養育した両親像が他者にも投影され、維持し続けられたと考えられる。②において年頃になった主人公が気に入った娘に嫌われながらも容易に諦めなかったというエピソードには、異性を求める欲求の背景にこの自己肯定感の存在が大きく働いていたと考えられる。他の物語においても臆せず他者との関係を展開させ、危機を乗り切っているところには同様の特徴が認められる。他方、④においては、主人公が思い立って鬼と一戦交える経過となっており、選択された他者への働きかけは対立的である。戦いの末に得た打ち出の小槌を自ら振っているなど、他者との相互性に乏しい展開であり、乳幼児期の濃厚な親子関係から一転している印象を与える。この場合は自己肯定感というよりも原始的な万能感そのままの水準で思春期・青年期を迎えたととらえることができるであろう。

物語の結末が親元への帰還に終わるものが②④⑥⑦⑧⑩と6話あり、結末は異なるものの、⑨も含めて親元を離れている間も内的な良い両親像を保ち続けていたことが推察される。いずれの場合も物語の途中で登場する親は父親であり、乳幼児期の養育期間を過ぎると、物語の中心が母親との関係から父親との関係へと移行する。

②⑥は鯉や狼に呑み込まれ、父親に助けを求めて命拾いしており、子どもから父親への信頼と父親から子どもへの強い愛着がうかがわれる。⑦は他の物語とは異なり、就学による児童期が描かれ、登場人物も多いため、父親との関係もやや複雑である。主人公が父親に自ら別れを告げて旅に出る際、父親から必要な馬と武器を与えられる場面と苦難の末にたどり着いた罪人を扱う場で王に

無実を告げられて齢を授かる場面は、父または父性を司る人物から認められ、内的にも意味のある良きものを与えられた場面である。この父親からの援助の間に大きな動物と3度戦う場面が挿入されており、主人公が動物に象徴される原始的な欲求と戦い、成長を遂げる姿が描かれている。その後、家に戻ると罪を着せられた主人公は旅立った年に亡くなったとされていた。これは、主人公を罪人だと見なしたのは父親であるにもかかわらず、息子の罪を否認し、父親にとっての罪を負った息子自身の存在をなきものとしたと解釈することができる。そのため、主人公の帰還に際して父親はわが子を名乗る人物に向かって弓を射て本人であるか否かを問わねばならなかったのであるが、主人公に命を賭けた方法で真偽を問う父親は、一見厳しい父性を体現しているかに見えるものの、実は試されるべきであったのは父親のわが子に対する信頼であったのではないだろうか。このようなすり替えは、物語の結末に主人公を寺から追放した坊が「お前は正直だったので戻って来れたのだ。…それ見てごらん」と主人公の無実が証明されたことを何事もなかったかのように認めて自身の誤解を不問にし、友達が矢に倒れて死んだことを当然とする姿と重なる。親役割をとる登場人物の分裂機制は最後まで修正されることなく物語が閉じられているが、病理の深いこの機制は現実の臨床においても修正が非常に困難である。

4) 思春期・青年期以降

誕生に始まる物語における主人公の人生は、これまで見てきたとおり思春期・青年期の自立に向かう課題を成し遂げたところでは末永く暮らしたという結末となり、人生後半が描かれていない。本来、発達とは生涯を通じた視点で捉えるものであるが、物語に描かれていないばかりでなく、一般に発達という概念から中年期・老年期がイメージされにくいのは何故であろうか。発達に上昇イメージを抱く場合、人生後半の身体的には衰弱に

向かう時期を発達として捉えにくい面は理解できる。しかし、人生後半の心理的な発達が長年重視されずにいた一因に、ここに述べた昔話にあるように新規な獲得を発達の中心とする人生前半の過程で終結する物語が語り継がれ、私達の発達イメージに影響を与えて続けてきたことがあるのではないだろうか。生まれた子どもが主人公となる物語の構成上、子どもを得た夫婦が両親として背景に退く全体の配置があり、子どもが異性との関係を得たり、自立の課題に一旦成功を収めると、親は親孝行という庇護を受ける存在となり、親子の役割が逆転する。この親孝行とは、物語においては生活に困らない豊かさを得ることであるとされており、その内容や継続性については語られることなく物語が終わる。これを幸福な結末であると意味づける価値観に私達は長年慣らされてきているのである。

平均寿命が延びて人生全体における後半の比重は大きくなり、私達は長年語り継がれてきた物語によるモデルのない年代を生き続けなくてはならない。それは、超低出生体重児の誕生に戸惑う親のもつ見通しのなさと同じ性質を持つものでもあるだろう。現在、中年期以降を生きる試行錯誤は語られても、今だ伝承に耐える老年期の物語が生まれたとは言いがたい。むしろ、倣うもののなさによる戸惑いから、思春期・青年期と同様の同一性を模索することが繰り返されているとも言える。限られた期間に親としての役割を全うし、養う側から養われる側へと役割交替する親子のあり方は、親にとっても子にとっても明確な見通しのある関係として分かりやすい。中年期・老年期にある人々が若さや力を失うまいとする現代は、メビウスの帯のような発達サイクルの中を生きていると言い換えることができるのかもしれない。

IV まとめ

日本の各地に伝承されてきた子どもの誕生をテー

マとする物語は、細部に違いがあるものの、人生前半の発達についての普遍性を見直す素材となるものと考えられる。いずれの物語にも良い両親像が描かれているが、本稿においては取り扱わなかった継子譚には継子をいじめる悪い継母が必ず登場し、特定の人物に悪い親像を分裂・付与することで物語の世界が守られてきたとも考えられる。物語の外に生きる生身の親は良い親とそうでない親との両面を必ず持っており、それらをバランスすることで現実を生きている。人生の選択肢が多様化し、自身の内面にある様々な側面のいずれに重きをおくかに迷い、良い親役割を全うできない成人期こそ今という時代に大きく影響されているのかもしれない。また、新生児集中治療室における心理的支援の臨床経験を通じて、高度医療が人間や家族のあり方に与えた変化の大きさを痛感する次第である。

近年、子どもが変わったということが話題に上がることがあるが、新しい文化や生活習慣によって変化した部分は確かに認められるものの、昔話に描かれた子どもの姿を通して、人として備わった発達の力と方向性には普遍的な側面があることが改めて認識された。発達障害という診断が安易に用いられる昨今、既に内在する発達の可能性を見守る重要性とそれを促し、支える親の役割を見つめなおす必要があるものと考ええる。

<引用・参考文献>

- Erikson, E. H.: Identity and the Life Cycle; selected papers in psychological issues, Int. Univ. press, New York, 1959. (小此木啓吾訳編：自我同一性, 1973.)
- 橋本洋子：周産期の心理臨床, 臨床心理学 第6巻第6号, 2006.
- 河合隼雄：昔話と日本人の心, 岩波書店, 1982.
- 関敬吾：日本昔話大成 第二 本格昔話 一, 角川書店, 1978.
- 関敬吾：日本昔話大成 第三 本格昔話 二, 角川書店, 1978.
- 鈴木美奈子, 梅田恵：超低出生体重児を出産した母親とのかかわりをとおして—NICUにおける母子関係への援助—, 小児看護第30巻7号, 2007.
- 高橋裕子：日本の昔話における妊娠と出産—葛藤の内包に関する一考察—, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 第8号, 2009.
- Winnicott, D. W.: The Family and Individual Development, Tavistoc, London, 1965. (牛島監訳：子どもと家庭—その発達と病理, 誠信書房, 1984.)
- 柳田國男：桃太郎の誕生, 柳田國男全集6, 筑摩書房, 1998.

Parent - child relationship in Japanese old stories

— devolvement of object relation in early life stage —

Osaka Shoin Women's University

Yuko TAKAHASHI

ABSTRACT

In the previous study, it is examined psychological process of the couples who experience pregnancy and child birth in eight Japanese old stories. It is suggested that parent-child relationship and psychological growth of children is influenced and developed by the ability and style of couple's conflict connotation. This paper discusses about psychological development of heroes and heroines and their parent - child relationship in eleven Japanese old stories, comparing present clinical issues in early life stage.

Keywords: Parent - child relationship, object relation, Japanese old stories, clinical psychology